

## 関連学会印象記

# 第64回日本循環器学会総会・学術集会

稲垣正司\*

第64回日本循環器学会は香川医科大学第二内科松尾裕英教授を会長として平成12年4月1日から4月3日に大阪国際会議場・リーガロイヤルホテルで開催された。本会は、国際セッション200題、口述発表1081題、ポスター発表954題、招請講演4題、シンポジウム4課題、パネルディスカッション4課題等という国内最大級の学会である。これだけの規模の集会を開催するにはおのずと開催可能な施設は限定されてしまう。今回も開催地を香川から大阪に移しての開催となった。メイン会場となった大阪国際会議場はこの春に竣工されたばかりであり、本会がそのこけら落としとなった。本会の運営においては、演題登録や査読がすべてインターネットを通じて行われるなど、情報技術の活用が目立った。一般口述発表でも、スライドの使用以外にパーソナルコンピュータの使用が認められており、これらのPC発表ではアニメーションやビデオ画像等が効果的に用いられており非常に印象深かった。

第64回集会のメインテーマ「Cardiovascular Medicine for Human Wellbeing in the 21st Century -人類の幸福に貢献する21世紀の循環器学-」には、松尾会長の“長足の進歩を遂げた20世紀の循環器学の現状を見極め、その光と影を踏まえて、真に人類の幸福に役立つためには、循環器学が21世紀に向けていかにあるべきかを皆で考える集会にしたい”との願いが込められている。このメインテーマに沿って、現状の整理という意味で8つの課題(経静脈コントラスト心エコー法・Unstable Plaque・閉塞性肥大型心筋症の治療・心臓移植・高齢者の心臓手術・小児心疾患のカテーテル療法・再灌流療法・ACEIとAIIA)について「コ

ロキウム」が企画され、現在賛否両論のある3つの課題(虚血性心疾患の管理・心房細動の管理・Evidence-based Medicine)についてはディベート形式の「コントラバース」が企画された。さらに、パネルディスカッションでは「新世紀を担う最先端医療技術」・「循環器領域における遺伝子診断・治療の現状と未来」・「循環器医療をとりまく社会的環境-21世紀への対策-」といった21世紀に向けたテーマが取り上げられた。ここでは、パネルディスカッションを中心に印象に残った内容を紹介したい。

「パネルディスカッションII 新世紀を担う最先端医療技術」では、先端的な理工学技術を応用した新しい医療技術の現状と将来展望について討論がなされた。まず、基調発表として川崎医科大学医用工学教室の梶谷文彦先生が、医学と理工学の融合による医療技術の発展について概説され、我が国における今後の医学・医療技術開発の方向性について述べられた。この中で、米国NIHのBioengineering Consortiumのような、①要素還元的知見の再構成による生体システムの理解、②基礎から実用研究までの移行の効率化、③生物学・医学・理工学の研究の効果的融合、を目指した組織的な取り組みの必要性が強調された。また、欧米の技術のキャッチアップではなく、日本がすでに大きな基礎技術力を持っている分野を重点化して日本独自の医療技術開発を行っていくことが戦略的に重要である、と述べられた。次に具体的な最先端医療技術として、基礎医学の分野から組織工学を用いた小口径血管の構築・レーザーオプティカルトラッピングを用いた心筋ミオシン発生張力の計測、臨床における診断分野からマイクロアレイ解析・心臓電気活動の3次元マッピング・3次元心エコー図、臨床における治療分野からコ

\*国立循環器病センター研究所循環動態機能部

ンピュータ外科・人工心臓についての発表があった。今までは夢であった技術が現実のものとなっていることに大きな驚きを感じた。また、基礎研究レベルでは国内に独自の新しい技術開発が生まれていることを心強く思った。一方、臨床的に実用化されている最先端技術の多くは欧米からの輸入によるものであり、“日本の医学研究体制には基礎研究を実用化する構造が欠如している”という印象を強くした。産業界との連携の上に“基礎から実用研究までの効率化”を実現する構造を確立することが急務と思われる。このためには、医学界から産業界にアピールする努力も必要であろう。総合討論で、座長の外山淳治先生が各先生方に“研究の中でどれだけ特許を取得しているか”という質問をされたのが印象的であった。国内の経済状況は慢性的な閉塞状況にあり、経済構造の大きな転換が求められている。政府は科学技術立国を政策の柱にあげており、これからの医学研究には知的所有権の取得による経済への貢献という責務も課せられてくるであろう。

「パネルディスカッションⅢ 循環器領域における遺伝子診断・治療の現状と未来」では、遺伝子診断・治療に関する国内の研究の現状について発表があり、遺伝子治療の実用化における問題点が検討された。特に、血管疾患に対する遺伝子治療はすでに現実のものとなっており、国内においてもヒトでの臨床試験が開始されつつある。遺伝子導入法などには課題も残るが、遺伝子治療の時代が着実に近づいていることを実感した。一方、この分野で日本が米国に比して大きく立ち遅れている原因として、①社会的コンセンサスが低い、②研究資金不足、③ベンチャー企業が生まれにくい、④臨床研究に関する審査が複雑である、といった問題点があげられた。ミレニアム・プロジェクト

などによりこの分野に大規模な研究予算が計上されているが、研究環境の構造的改革によってこれらの問題点が解決されなければ日本が遅れを取り戻すことは困難であろう。

「パネルディスカッションⅣ 循環器医療をとりまく社会的環境 -21世紀への対策-」では、高齢化が加速し医療財政の破綻が危惧される21世紀の循環器医療のあるべき姿を模索すべく、医療経済の現状・診断群別包括支払い方式(DRG/PPS)・医療提供体制の改革・地域医療・高齢者医療などについて討論がなされた。特に国民医療費の抑制は差し迫った問題であり、行政側からはDRG/PPSの導入や診療機関の機能分けなどの試案が出され、市場原理の導入による合理化の必要性もいわれている。このような状況の中、DRG/PPS導入後の米国医療の状況が報告され、市場原理優先による医療の合理化に警鐘が鳴らされた。米国では、支払い側の保険会社の権限が強くなり患者権利の保護が必要なまでになっているとのことであった。また、DRG/PPSについても、診断群の分け方について米国方式の問題点や、材料費の占める割合が高い日本の医療費の特徴を考慮することの必要性が述べられた。一方、予防から治療までの全体をとらえて効果的な医療資源の投入方法を検討することの必要性や、治療法の費用対効果を分析する必要性も提言された。

21世紀を目前に循環器医療は二つの意味で大きな転換期にある。一つは遺伝子治療・再生医療・先端的理工学技術医療の実用化であり、もう一つは医療ビックバンといわれるような社会的転換である。今世紀最後の学術集會はこの大きな変化の波を参加者に強く感じさせるものであった。この波の中を一步一步前進すれば、その先に明るい21世紀が待っているに違いない。